

前窯産である。

磁器 伊万里窯産の染付皿（第26図12）などがある。

青銅製品（第26図11） 口径二・七センチの皿状のもので、底部中央に小孔がある。

以上調査区域内において、出土遺物は遊離した状態のもので、また保存を要する遺構が検出されなかったので、予定通り工事を実施した。

（井上喜久男）

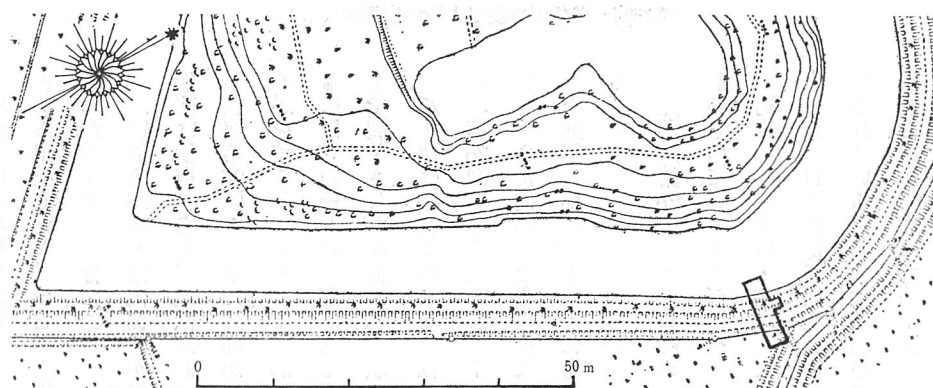
埴口丘陵外堤の樋管改修箇所の調査

埴口丘陵は、前方部の大きく開いた前方後円墳で、周濠を繞らしている。

後円部中軸線よりやや東側の外堤下を横断して水路に抜けている濠水の排水管が詰って付替えることとなったため、昭和五十四年二月十九日から三月一日までの十一日間にわたって事前調査を実施した。

調査は、施工部全域を発掘することとし、幅二メートル、長さ八・五メートルのトレンチを設定して行った。この他、小土堤の中心部に鉄筋コンクリートの止水壁を設ける計画が付帯していたため、トレンチ中央部を北側に幅・長さ各一メートルにわたって第28図のように拡張した。基本的な層序は次のとおりである。

I層 表土。



第27図 埴口丘陵トレンチ位置図 (1/1000)

II層 築堤以後の堆

積土である。西寄りの

土層は小土堤の部分的

損壊に伴うものである

が他は東側の水路掘削

時における排土を盛り

上げたものである。

III層 II層と同じく

築堤以後の堆積土であ

るが、これは周濠内堆

積である。上面はへど

ろで、その下に黄白色

の細かい砂層がある。

IV層 現在の小土堤

を構成している盛土層

である。褐色系の土層

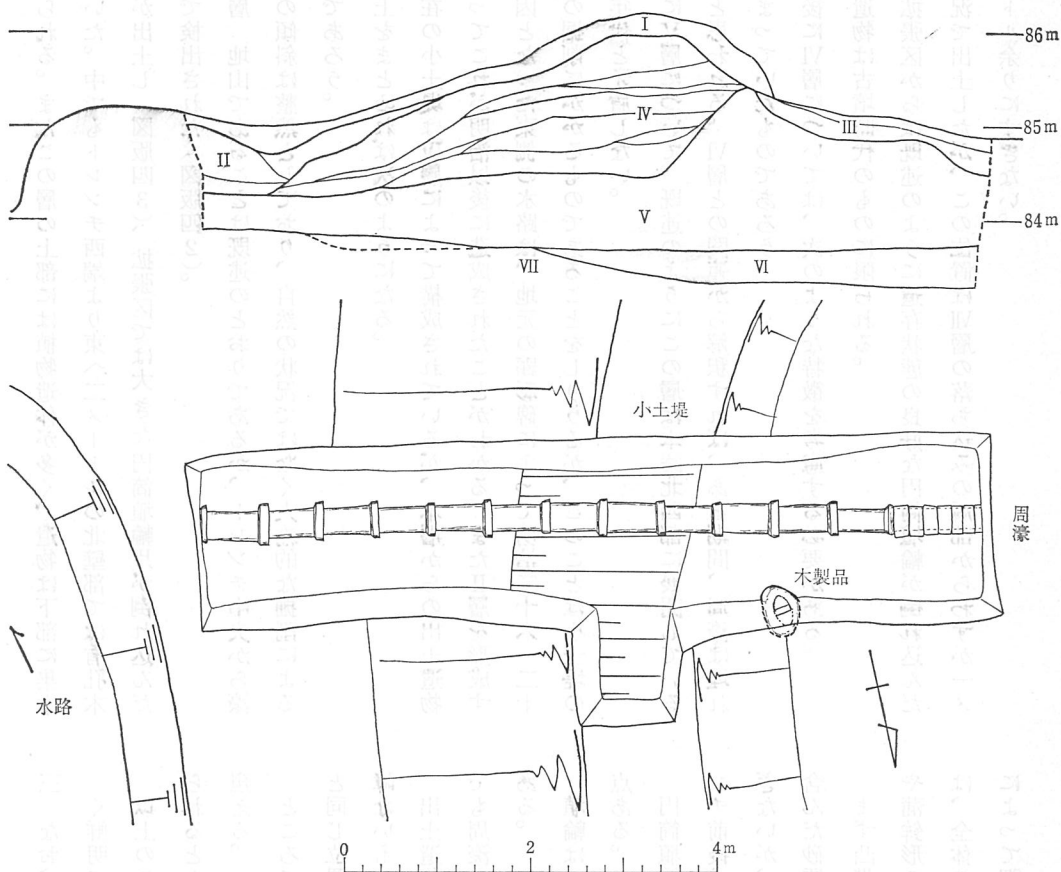
と砂層を交互に置いて

崩壊しないように突き

固めている。注目され

るのは、この層の下面

が、東端から小土堤下



第28図 埴口丘陵トレンチ平面および断面図 (1/80)

までは一直線をなすのに対して、小土堤の内法斜面の下部では土堤とは逆の方向へ、すなわち東に向かって下っていることである。このことは、築堤に際してまず基盤を整える目的で下層の一部を削り取り、濠側に積み上げたことを示しているものと考えられる。IV層からは埴輪片の他、近世近代陶磁器の破片も出土しているので、現在の小土堤が明治年間に造成されたものであることがわかる。

V層 青灰色粘質砂層で、土堤だけでなく周濠下にも広がっている。また、本陵の北西側に接する地点の調査⁽¹⁾によっても同様の層の存在が確認されている。従って、V層は当陵周辺一帯に広がっているかもしれない。ところで本層からは近世の陶磁器が出土しているので、この層の堆積は近世まで続いていたことがわかる。そして堆積の状況は均質ではないので人工が加わった可能性があり、周濠はこれによって埋まってしまったのであろう。

VI層 埴輪を中心とした古墳時代の遺物を大量に包含した暗褐色粘質土層である。この層は地山である灰色砂層(VII層)の上のっており、堆積はVII層が下降する現土堤下より西側、すなわち埴丘側だけ

にみられる。またこの層の上部には植物遺体が多く、遺物は下部に集中していた。中でもトレンチ西端より東へ二メートルの北壁部では有孔木製品が出土し（図版四三）、拡張区では大きな円筒埴輪片が倒れ込んだ状態で検出された（図版四二）。

VII層 地山であることは既述のとおりであるが、トレンチ中央から濠側への傾斜は整然としており、自然の状況ではなく人為的な掘削によるものである。

以上をまとめれば次のようになる。

現在の小土堤はIV層によって構成されているが、本層からの出土遺物によってこれが明治以後に造成されたことがわかる。またII層を形成する原因となった東側の水路は、地元の顕彰碑によって明治二六・二七七年の掘削にかかるものであることをしりうるが、このことは小土堤の造成年代と矛盾しない。

次にV層について。既述のようにこの層は本陵北西部に展開しているものと思われる。VI層との関連から解釈すれば、ある期間、周濠は埋れてしまっていたものであろう。

最後にVI層については、次のような特徴を考慮する必要がある。

一 遺物は古墳時代のものに限られる。

二 拡張区からは既述のように遺存状態の良好な円筒埴輪が倒れ込んだ状況で出土したが、この位置はVII層の落ち込みの肩部からわずか一メートル余りにすぎない。

三 なお、出土した遺物は他層のものと比較して、割れ口ははるかに鋭く鮮明であり、移動の形跡はあまりない。

以上のことから、この層は原初の周濠に堆積したものであることがしられるとともに、原初の周濠幅は現状よりも数メートル広かったことが窺える。

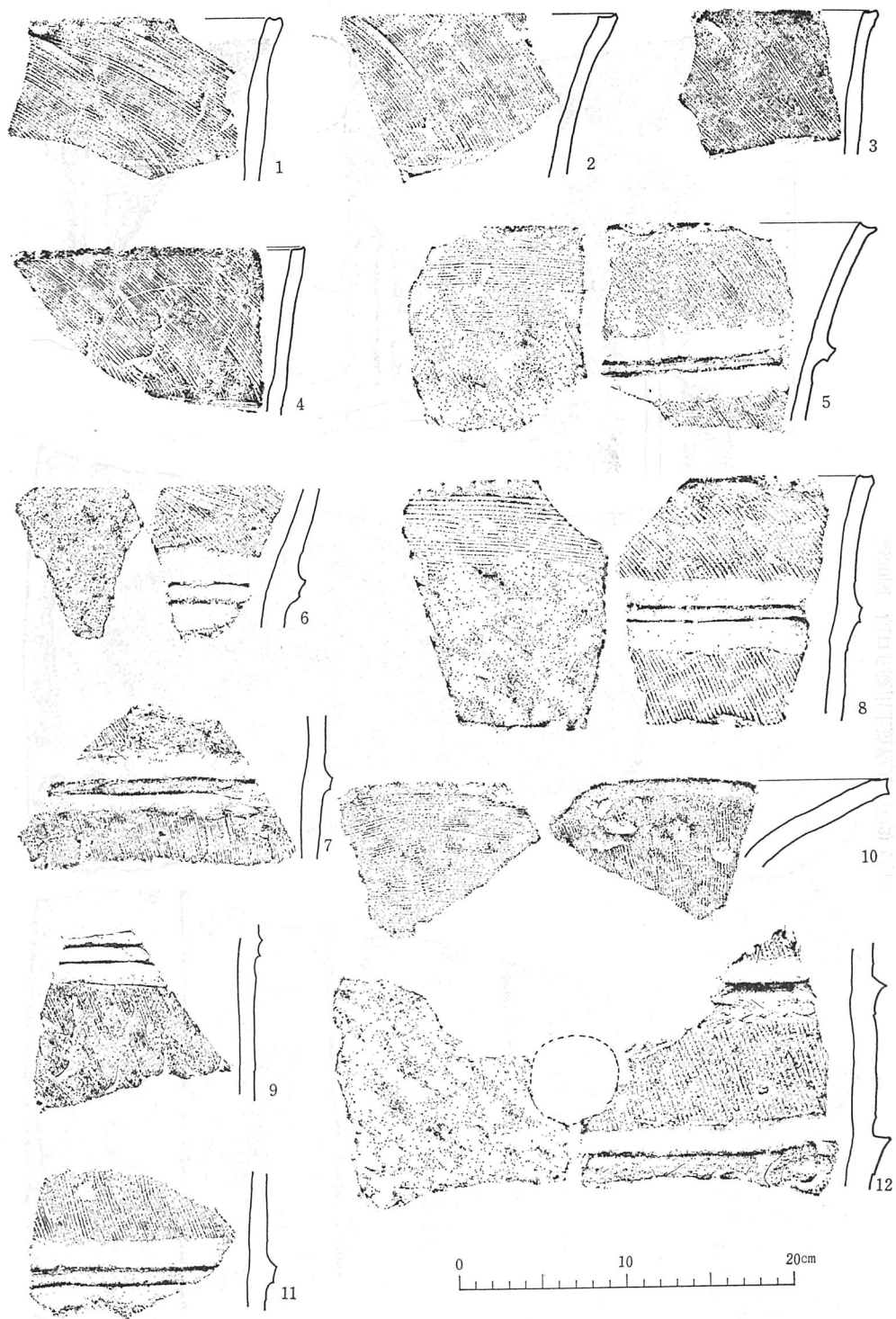
ところで、新設の排水管はV層を掘り込んで敷設していた既設のものと同じ位置に付け替えることとなっていた。従って工事にあたっては支障ないものと考え、予定通り施工した。

出土遺物には、埴輪・陶磁器・瓦器・土師器・瓦・木製品がある。中でも周濠内の堆積であるVI層から出土した埴輪や木製品は貴重なものである。

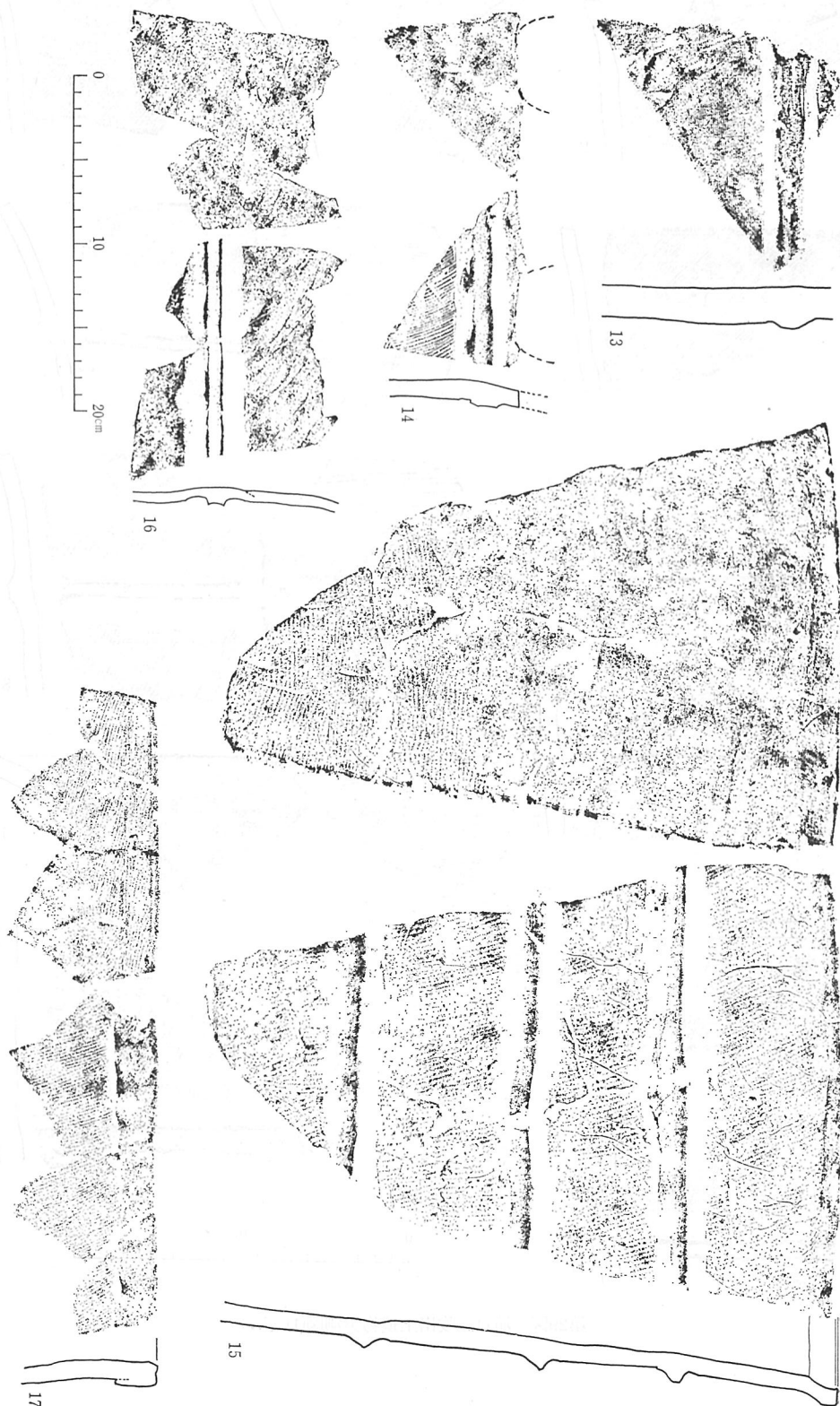
埴輪は、朝顔形を含む円筒埴輪片がほとんどで、他に形象埴輪片が一点ある。

円筒埴輪（第29～31図） 全形を窺えるものはないが、口径は三〇センチ前後、底径は二五センチ前後を測る。計測しえたのはごく一部にすぎないが、大体の法量は推せよう。ほとんどのものが、胎土は赤色粒を含んだ砂質のものをを用いており、色調は赤褐色ないし黄褐色を呈する。

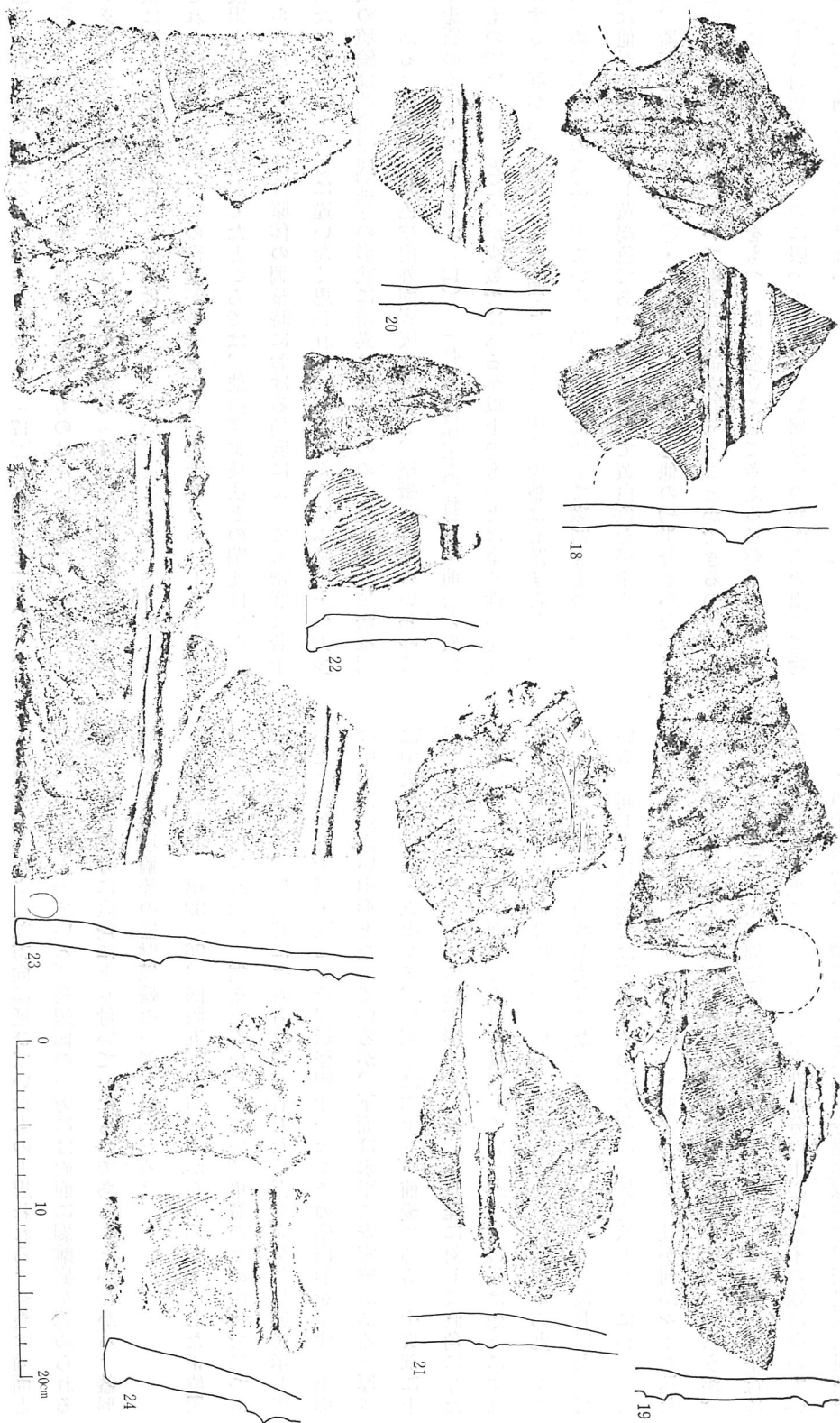
まず凸帯についてその断面をみると、一部に三角形のもの（12・15）や蒲鉾形のもの（13）を含むが、多くは突出度の低い台形をなす。底部は、全体の形成が終了した後に、内部を指による撫で、ないしは押さえによって調整するものがある（22・23）。このために断面をみると内面



第29図 埴口丘陵出土遺物実測図(1) (1/4)



第30图 堆口丘陵出土遗物实测图(2) (1/1)

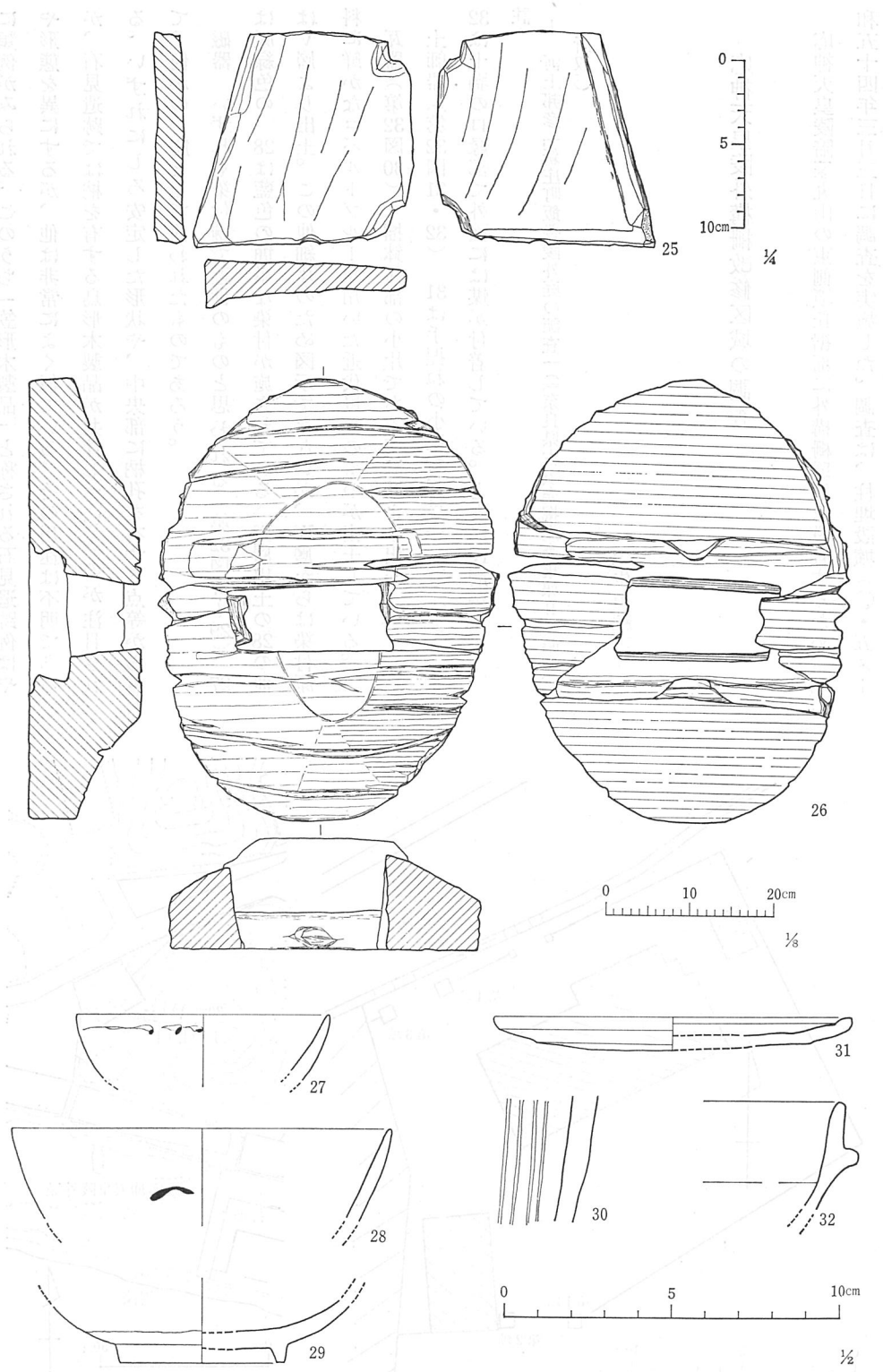


第31図 埴口丘陵出土遺物実測図(3) (1/1)

が外方に向かって削られたようにみえるものもある(22)。一方、口縁部では折り返しのあるものが注目されよう(17)。外面調整については、凸帯貼付以前に縦はけを施す他特に顕著なものはない。また、調整とはいえないが、口縁部に刻線を施すものがある(4)。一方、内面調整は、横はけが一部に認められるほかは、撫でが多い。ところで、内外面に施されたはけ目についてこの密度が重要視される場合がある。しかし、本陵出土品について検討したところでは、他の調整技法との関連は何ら認められなかった。はけ原体の調整時における角度によっても密度は若干異なったものとなるに違いなく思われる。上記のように本陵出土の大多數の埴輪は凸帯や底部等の形状に差異はあるものの、基本的な技法は同一である。外面が赤紫色や内外面青灰色を呈し、堅緻な焼成のいわゆる須恵質のものも若干あるが(14)、これとて技法上の特徴は前者と異なるものではない。ところが少数ではあるが以上のものとは全く性格を異にする一群がある(16)。内外面ともはけによる調整は痕跡すらなく、はじめから撫でのみによっている。胎土も他に比して緻密なもので、色調は他が赤褐色ないし黄褐色であったのに対して黄白色を呈する。しかも、器壁も極端に薄く、 $\bigcirc \cdot 6 \sim \bigcirc \cdot 7$ センチと他の約半分しかない。このように多くの点において顕著な相違を認めることができるので、少数ではあるが以上の特徴をもつ一群は独立させて考える必要がある。以上はVI層出土のものに限ってみたが、V層以上の層からの出土遺物についても何ら異なる所はない。

形象埴輪(第32図25) 平行四辺形のような形状であるが、本来は図に破線で示したような方向に延びていたものと思われる。調整は両面とも撫でのみによっている。長辺側の一方には両面に剝離痕が認められるので、他の部分に直角にとり付いていたものであることがわかる。蓋形埴輪や盾形埴輪等の器財埴輪の一部と思われる。

有孔木製品(第32図26、図版五) VI層中から上面を上にした正位置の状態で検出されたが、据えたものではない。亀裂のため中央で二つに割れているが、検出時には両者は、密着した状況で完全な状態を示していた。長径五十三・五センチ、短径四十一センチの楕円形を呈す。上面は中央部が高い山形となっているが、下面は水平で安定感がある。厚さは中央部で一三・五センチ、縁部では六センチ前後である。中央部に上面で一八・五×八センチの長方形の孔が長辺を長径に対して直角に穿たれている。これは下面まで垂直に貫通しているが、短辺側は徐々にすばままる一方、長辺側は広がっている。また長辺側では上面から九センチの位置で両側とも角度が大きくなっており、断面をみると段状になっている。同じく長辺側では底部近くの中央部に、幅約八センチにわたって一センチ程突き出した所が両側に一カ所ずつある。孔が何かを差し込むための柄孔であるとすれば、それを安定させるための工夫であろうか。材質は高野槇の太木で周辺部の板目材を使用し、木目は表裏とも平行に走るが下部は木裏にあたる。なお有孔部分の中心は原木の軸に向いている。この木製品は、応神天皇陵と京都府今里車塚古墳、奈良県石見遺跡



第32図 埴口丘陵出土遺物実測図(4)

磁器 いずれも染付碗で近世のものと思われる(第32図27~29)。27は灰緑色の、28は藍色の簡単な染付が施されている。IV層出土の28の他はV層より出土。この他細片のため図示できないが、IV層からは染付原料に鮮かなコバルトブルーを用いた近代以後のものが出土している。

瓦器（第32図30） 擂鉢体部の小片である。V層より出土。

土師器(第32図31・32)
31は手捏ねの小皿で、口径一〇・六センチ。

32は土塙の口縁部で外面には煤が付着している。ともにIV層から出土。

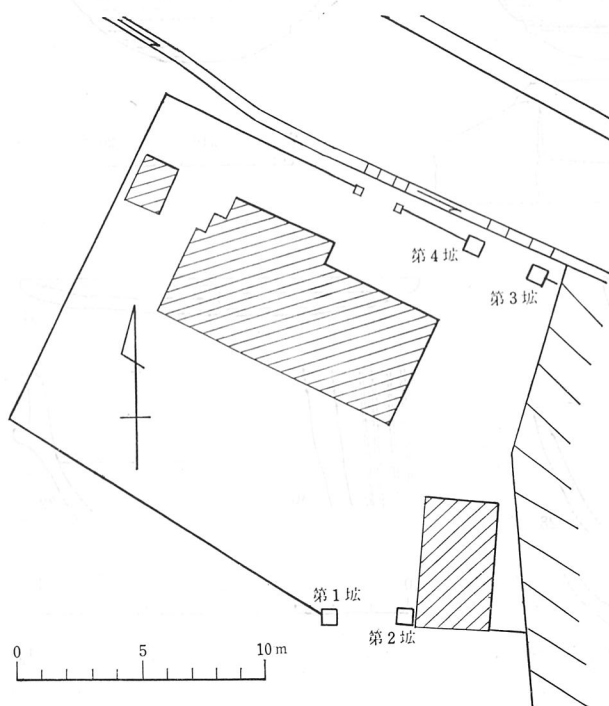
註

1 河上邦彦「新庄町飯豊陵外庭の調査」(『奈良県古墳発掘調査集報Ⅱ』昭53所収)。

(土生田純之)

応神天皇陵外構柵改修区域の調査

応神天皇陵陪冢丸山の東側墳丘裾部に外構柵扉柱を設置するため、昭和五十四年三月三日に調査を実施した。調査は、柱埋設墳（〇・五メー



第34図 応神天皇陵域内丸山外構柵扉柱設置箇所図 (1/300)



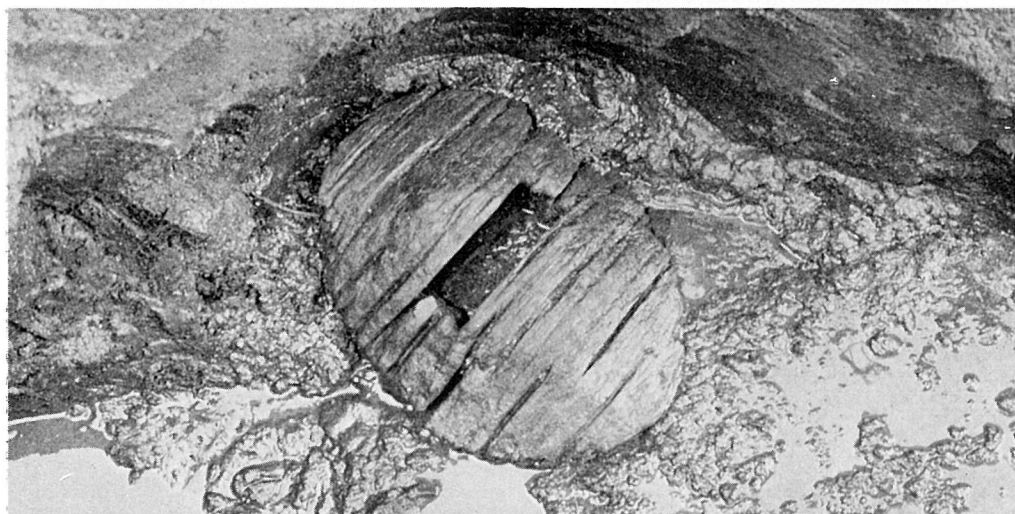
第33図 応神天皇陵域内丸山
周辺地形図 (1/200)



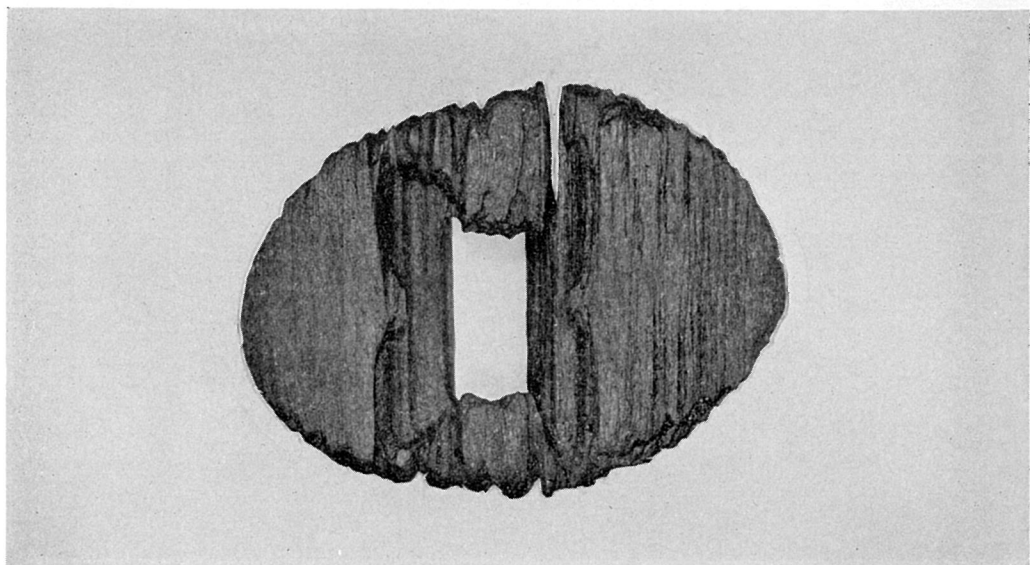
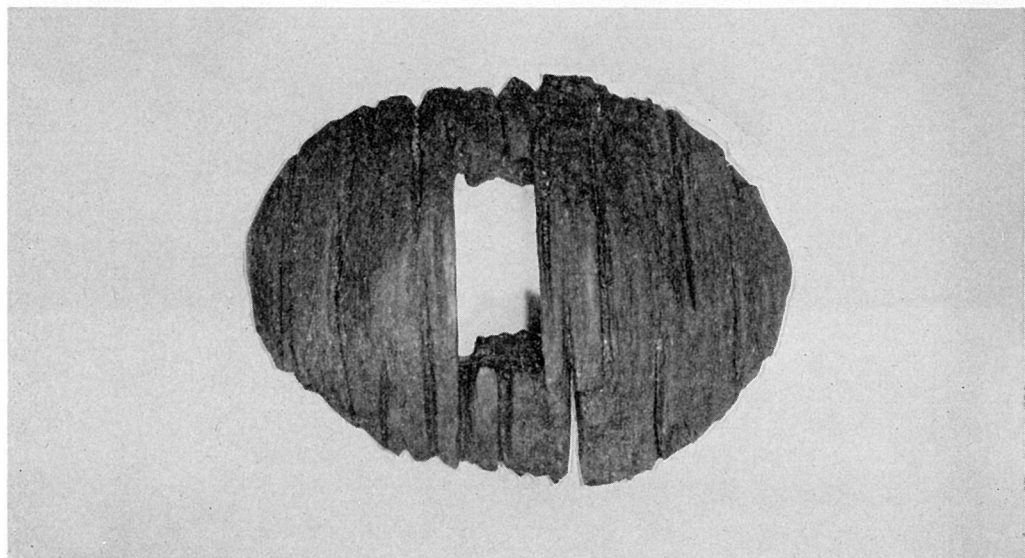
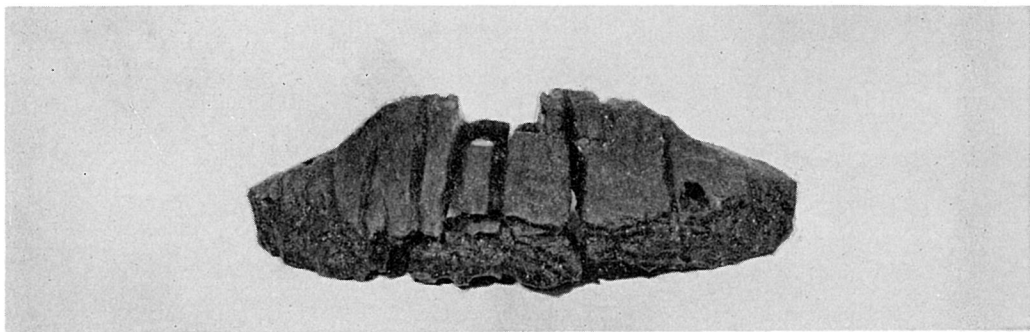
1. 欽明天皇陵 第12トレンチ石垣（東から）



2. 埴口丘陵 埴輪出土状況（南から）



3. 埴口丘陵 有孔木製品出土状況（南から）



埴口丘陵出土の有孔木製品 上 側面, 中 上面, 下 下面